

アクティブスチューデント応援奨学金活動報告書

はじめに

私は、海外ボランティア活動に参加することによる異文化理解と、語学研修による英語力の向上をテーマとして掲げ、約1か月と1週間にわたる活動を行いました。この活動に際して、私の具体的な取り組みと、その活動から得た学びについて報告します。

概要

まず、活動の概要について紹介します。

1. 活動題目

「タイ北部に暮らす山岳民族の支援活動を通じた異文化交流及び語学研修」

2. 活動内容

- ・タイ北部の山岳地域でのボランティア活動
- ・フィリピンの語学学校にて語学研修

3. 活動期間

- ・ボランティア：2024年1月28日～2月3日（1週間）
- ・語学研修：2024年2月4日～3月2日（約4週間）

4. 活動場所

- ・ボランティア：タイ・チェンライ
- ・語学研修：フィリピン・セブ

背景

今回私は、タイでの山岳民族支援ボランティア活動と、フィリピンでの語学研修を行いました。このような活動を計画し、実行するに至った背景は、大学の講義で異文化経営や多文化主義について学んだことにあります。自分と異なる文化やバックグラウンドを持つ人々との相互理解の重要性や、異文化間の経営の課題や複雑さについて知ったことで、それらにどのように対処するかを実際に考える経験をしたと考えました。

目的

今回の活動を行った主な目的は、以下の3点です。

1つ目は、英語力の向上です。フィリピンでの1か月にわたる語学研修を経験することによって、毎日の授業で自身の英語力を強化していくことはもちろん、英語を日常的に使う環境に身を置いて、英語に触れる機会をできるだけ増やすことによる、スピーキング力

の強化を目的としていました。タイでのボランティア活動も含めて、海外で生活するうえでは英語を用いて現地の人と会話することは必要不可欠です。そのため、英語を単なる科目としてではなく他者とのコミュニケーションツールとして捉え、積極的に出会った人と交流することを意識していました。

2つ目は、ローカル地域に住む人々の自給自足生活から、自分自身の生活の仕方を顧みて学ぶ機会を得ることです。日本人はタイ現地の人々と比較すると、豊かな暮らしをしていますが、現在廃棄衣料や食品ロスが深刻な問題になっていることもあり、伝統的な技術や文化によって慎ましい生活を送っている現地の人々から学ぶ必要があると思いました。そこで、全く違う生活様式を経験する中で、どのような部分を自身の日常生活にも活かすことができるのかを考えるようにしていました。

3つ目は、異文化を自分の肌で感じることでグローバルな視点で物事を見る力を養うことです。ボランティア先の山岳民族には、政治的な問題により隣国から逃れてきた移民が多くいるため、タイ人としての戸籍がなく、医療や教育の機会を得ることができないという事例が問題になっています。そこで、現地の人々が見舞われている「貧困」、「インフラ整備の不足」、「教育格差」などの多数の社会問題について、実際にお話を伺い、考えを深めていくことが、よりグローバルな視点で物事を見られるように成長することに繋がると考えました。

具体的な取り組み

次に、今回の活動の2つの軸である、タイでの山岳民族支援ボランティアと、フィリピンでの語学研修に関して、実際に行った活動内容の詳細を報告します。

1. 山岳民族支援ボランティアへの参加

1-1. 活動の大枠

ボランティア活動を行った場所は、タイ北部にあるチェンライという山岳地帯です。チェンライは、ミャンマーとラオスの2国との国境付近に位置しており、この地域には、様々な山岳少数民族が暮らしています。ここでは、1週間の活動期間の内、最初の3日間はボランティア運営団体の宿泊施設に滞在し、山岳民族を取り巻く社会課題や文化、歴史的背景についてレクチャーを受けた後に、現地スタッフとともに同じ地域内にある小学校にてボランティア活動を行いました。その後3日間は山岳民族の村にてホームステイをさせていただき、活動最終日には、タイの寺院やアヘン博物館、国境エリアに位置するゴールデントライアングルなどに訪れ、タイ、チェンライに関する地理的・社会的特性や、古くからの周辺国との関係性について学びました。

1-2. 小学校の外壁塗装補修活動

ボランティア運営団体の宿泊施設に滞在している間は、その施設と同じ地域にある現地の小学校にて、劣化している外壁の塗装を剥がし、外壁に付着している泥汚れなどを綺麗に掃除することで、新たにペンキ塗りをするための土台作りを行いました。



外壁塗装ボランティアの様子

1-3. 団体の宿泊施設での生活

宿泊施設は、タイの都市部から離れており、多くの自然に囲まれているため、その特性を活用した自給自足生活が行われていました。洗濯は手洗いし、シャワーは温水ではなく通常の水を使い、食料は庭で育てたものを多く使っていました。他にも建物の風通しを良くすることで、夏でもエアコンなしで快適に過ごせるような工夫がなされていたり、家具も自作の物を多く使用していたり、できるだけ廃棄物を出さないように 3R を徹底的に行っていたりと、自然と共生するための工夫が所々でなされていました。

ここでの生活によって、私は日々の暮らしの中で、快適さを重視し、自然環境について意識を全く向けられていなかったことを体感したとともに、個人の家庭でも、自然を保護するためにできることは幅広くあり、小さな取り組みであったとしてもそれらをまず実行することが重要だということを学びました。

1-4. 山岳民族の村ホームステイ

チェンライ地域には様々な山岳少数民族が暮らしていますが、私がホームステイ先として訪れたのはアカ族のアパー村という村です。アパー村は小さい村であるため、近所の家庭とのつながりが強いのはもちろん、村全体で非常に親しい関係にあり、誰かが困っていれば、皆で助け合いをする文化を大切にされていました。近くの山で、他の人が育てている野菜や果物は、その育てた人だけのものとして分けられておらず、同じ村の人全員でシェアするという形になっていて、村の住人であれば、自分が使う分を自由に取って食べることができます。さらに、タイは仏教徒が国民の大部分を占めており、寺の数も非常に多いです。アパー村にも寺が建っており、毎朝 6 時頃に僧が村を訪れ、村人が供え物を僧に渡した後、僧が念仏を唱えてまわるという習慣があります。



民族衣装を着た村の人々

また夜食の時間には、ホームステイ先の家庭のお父様に、この村で生活するようになるまでの経緯と、ホームステイの受け入れについて伺う機会をいただきました。彼は、ミャンマーでの戦争から逃れて 19 歳でこの村に移り、タイの国籍を得たそうです。タイとミャンマーは歴史的に深いつながりがあり、国境沿いには多くの移民が住む難民キャンプが複数設置されているそうです。そのキャンプに住む難民の大部分は軍事政権の弾圧から逃れてきたミャンマーの少数民族で、キャンプで生まれた彼らの子供たちはミャンマーとタ

イのどちらの国籍も保有していません。こういった問題から、村にも無国籍の方がいらっしゃるそうです。

1-5. 村でのごみ拾い活動

アパー村でのホームステイをした際に、村の子供たちと一緒に道路のごみ拾い活動を行いました。子供たちも積極的にごみ拾いに協力してくれて、大きなごみ袋を1枚持って活動を開始したのですが、最終的にはそのごみ袋が、みんなで集めたごみでいっぱいになりました。ごみ拾い活動が終わった後に、ボランティア団体に寄付されたおもちゃやシールなど



ごみ拾い後のおもちゃ配布

を子供たちにプレゼントすると、それぞれ欲しいものを選んで貰っており、とても嬉しそうにしていました。支援として団体に寄付されたおもちゃなどが、実際に子供たちの手に渡り、子供たちだけでなくスタッフやボランティア参加者も、皆がきらきらとした笑顔を浮かべている場面を目にして、寄付活動の素晴らしさを身に染みて感じました。

2. 語学研修

2-1. 語学学校での授業について

私は、自身の英語力の中で特にスピーキング力を重点的に鍛えたいと考えていたため、スピーキングに特化した授業を提供している語学学校を選択しました。1日に、50分間の授業が7コマあり、そのうちの3コマがグループ授業、4コマがマンツーマン授業でした。授業がなく空いている時間は、予習復習の時間に充てたり、友達と過ごしたりして自由に過ごすか、無料のオプション授業に参加して、トピックカンバセーションのレッスンを受けるかを自身で選択するという形式でした。

語学学校では当然すべてのレッスンが英語で行われるため、最初のうちは文法などの勉強を進める際のアカデミックな用語を理解することができず、かなり戸惑いました。しかし、毎回の授業の初めに、前回の授業内容の復習をクイズ形式で問われ、それに回答するということを繰り返し行っていたことで、楽しみながら効率よく記憶するのに非常に役立ちました。また、文法や語彙、イディオムについて学ぶ際には、その背景も同時に教えてくれ、それを使って自分で例文作成を行っていたことで、ただ暗記しようとするよりも納得感があり、記憶に定着しやすかったと感じています。

留学前の英語力は、基本的な日常会話はできるが流暢にコミュニケーションを取るのには難しいという状態でした。語学研修の後には、自身のスピーキング力に劇的な変化はありませんでしたが、留学以前と比較してボキャブラリーが増え、英語を話すことに慣れたため、ミスを臆することがなくなり、伝えたいことを考えて口に出すまでにかかっていた時間が短くなりました。

図 1: 一日の授業スケジュール

	時間割	内容
7:00~8:00	朝食	
8:00~8:50	グループ	Listening
9:00~9:50	マンツーマン	Speaking
10:00~10:50	グループ	Vocabulary
11:00~11:50	オプショナル or フリー	Speaking
12:00~13:00	昼食	
13:00~13:50	マンツーマン	Speaking
14:00~14:50	グループ	Grammar
15:00~15:50	オプショナル or フリー	Speaking
16:00~16:50	マンツーマン	Reading
17:00~17:50	マンツーマン	Speaking
18:00~19:00	夕食	

2-2. マンスリーテスト

語学学校では、月に1度マンスリーテストを受けることで、4技能それぞれの英語力の伸びを客観的に確認することが可能でした。1か月の語学研修を終えて受けたテストの結果では、校内で1位の成績を収め、自身の総合的な英語力の向上を実感することができました。特に Listening と Reading に関しては、レベルを2段階向上させるまでに至り、短期間だとしても継続的に英語に触れる時間を確保することの重要性を改めて感じました。

2-3. ローカル街と現地の人々

セブ市内にある、コロンストリートという、現地の人々が買い物をする際によく利用されるローカル街へ訪れました。そこには、ストリートチルドレンが道端で待機しており、外国人観光客を見つけては、お金や物を乞う姿をよく目にしました。通りでは、服や食べ物などがかなり安く売られていましたが、外国人には高く値段を設定する店も多くありました。常にごみや下水の匂いが漂っており、都市部とは全く異なる印象を持ちました。



ローカル街の様子

フィリピンの物価は日本と比較して安いですが、その分、働いて得られる給与もかなり少ないです。授業内に先生から伺った話によると、語学学校にて1か月フルタイムで働いた場合に得られる給料は約12,000ペソで、日本円にすると約32,500円程度になります。物価が高くないとはいえ、給料だけでは生活するのが難しいため、フィリピンでは副業をしている人が多数いるそうです。貧困に苦しみ、家庭環境が悪化した結果、子供がストリートチルドレンになってしまうという事例が多いようです。

所感

ボランティア先で出会った方々は、家具作りから食料調達までをすべて自ら行い、お互いに助け合って生活されていました。技術発展の影響で希薄になっている人とのコミュニケーションや、ゲームの普及や機械化による、外に出て体を動かす機会の減少などが今日問題視されていますが、それらが広く普及していないからこそ守られている伝統や、密接な地域の繋がりを強く感じられました。その姿を見て、豊かな暮らしを送ることが一概に良いことではないのかもしれないと思いました。それとともに、異なる生活様式を経験し、多様な文化的背景を持つ人々と接することで、貧困や地方格差、無国籍などの社会問題の実態と深刻さを知り、この状況はそのまま放置されてはいけない、改善されなければならない問題だと理解しました。こうした課題や環境の保全に対して、一人でも多くの人が関心を持ち、少しずつでも貢献しようと取り組むことが必要だと考えます。個人としては、タイやフィリピンでの社会問題について関心を持ってもらうために、その実態をまずは近くの人に知ってもらい、支援を行う人が増えるようにしたいと考えています。また環境保護のためには、廃棄物をできるだけ作らない生活を徹底することから始め、徐々にできることを増やしていきたいと思います。

語学研修に関しては、個人のやる気次第で、留学全体での英語力の伸び方は大きく変わると感じました。フィリピン留学の利点は、豊富な授業数と高いマンツーマン授業比率にあり、自分のレベルに合わせたレッスンを受けることができます。ただし、授業前後の準備や復習を怠ると、ただ受けただけで終わってしまい、折角の学習の機会を有効に活用できません。そこで、例えば授業前に話すトピックを考えておくことで、授業中はアウトプット中心で効率よく進めることができ、意見も浮かびやすくなるでしょう。また、授業後にわからなかった単語を全てまとめ、それらを覚えることで、日常会話で使える語彙を増やすことができます。マンツーマン授業中心のため、先生の授業スタイルに対して自分の希望を反映してもらいやすく、うまく活用できれば英語力向上に大きく寄与すると思いました。

終わりに

アクティブスチューデント奨学金により、私は他国の文化や生活様式に触れることで、異文化を受容し、自分の生活の仕方を顧みるための貴重な機会をいただくことができました。さらに、学外において、目標達成のために一から計画を立て、そのプランを実行し、最後まで遂行することができたという経験は、私自身の大きな成長につながりました。

このような機会を提供して下さった国際経営学部教授方や職員の方々をはじめ、ボランティア運営団体スタッフの方々、語学学校の先生方、保護者、この活動におけるすべての関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。